

【書評】

『英語教育の精神と実践
—コミュニケーションから英米文学まで』

中邨 早希

Book Review: The Spirit and Practice of
English Language Education—
From Communication to American Literature

NAKAMURA Saki

長崎外大論叢

第25号
(別冊)

長崎外国語大学
2021年12月

【書評】

『英語教育の精神と実践
ーコミュニケーションから英米文学まで』

中邨 早希

Book Review: The Spirit and Practice of
English Language Education—
From Communication to American Literature

NAKAMURA Saki

Abstract / Short Outline

For a long time, English language teaching approaches have given greater priority to teaching fluency. It should be noted, though, that unorganized verbal practice deprives language learning of context, making any real development of communication skills impossible. The author argues that English language teaching should include skill-based instruction and an introduction to cultural practices (education, thought, and literature) since these are crucial to the overall development of the learners into well-rounded beings. This book challenges the current trends associated with the teaching of English language that are embedded in a culture of excessive demands for efficiency and a mentality of only learning the language at a superficial level.

キーワード

英語教育、文学教材、英米文学

概要

英語教育において、従来の手法が批判され、流暢さを重視したオーラルメソッドでの教授法が賛美されるようになって久しい。しかし、やみくもに口頭での練習を行うだけではその文章に中身が伴うようにはならず、真にコミュニケーション能力を育成することはできない。著者は今後の社会を支える人材を育成するために、英語教育において英語の「技能」と「文化（教養・思想・文学）」の指導どちらかを軽視してはならないと主張している。本著は英語学習に効率を過剰に求め「言語だけでできるようになればよい」とする風潮に警鐘を鳴らす一冊となっている。

序：本著を推薦する対象者

はじめに、この書評において岡田善明著『英語教育の精神と実践ーコミュニケーションから英米文学まで』（2013年4月24日初版発行、春風社）（以下、本著）を推薦する対象は小学校・中学校・高等学校の教員を目指す学生とする。また、自分の指導方法に不安がある、学生の英語技能が向上しているのか効果を認識できないという教員にも本著は有用であると考えている。その理由を述べる前に、まず

は本著の章題を示す。

第一章	英語教育の目的と価値
第二章	日本の英語教育史外観と英語教育の発展
第三章	外国語教授法の変遷
第四章	第二言語の習得論の変遷と英文法の指導
第五章	生きた英語能力の育成のために
第六章	コミュニケーション活動
第七章	学習者言語の分析と指導
第八章	授業考察と生徒理解・評価
第九章	小学校の英語教育
第十章	異文化理解と言語・精神文化の指導
第十一章	日本語と英語の表現構造の比較
第十二章	教育実習

このように、本著では英語教育の概要・現場での指導方法・精神性の教育といった内容が取り上げられている。また第12章には「教育実習」という項目があり、教育実習のため学校に赴任する際のTipsが述べられている。このことから、著者が本文中で明言しているわけではないが、本著は小・中・高等学校の教員免許を取得しようとする者を読者に想定しているといっていよう。その点を考慮してか、著者は非常に明瞭な文章を用いて英語教育の歴史や理論を概説している。英語教師を志す者はぜひはじめに読んでおきたい一冊になっている。

加えて、著者が現場で英語教育を行っていた経験に基づき、実際に著者が直面した問題とそれに対する解決案の例示がされている。もちろん教える教材や学生のレベルに違いはあるだろうが、同じような問題に悩む中堅教員に対しても応用が可能な内容になっている。理論を学ぶだけでなくケーススタディとしても参考にできるだろう。

本書評では、これらの学生・教員に筆者が本著を推薦する以下の三つの理由を述べる。

1. 英語教育に関連する理論や現状が概説されている点
2. 精神修養の重要性を検討し、そのための教材を示している点
3. 精神修養を意識した指導実践例が示されている点

1. 英語教育に関連する理論や現状が概説されている点

まず第一章では日本での英語教育史を振り返り、問題点を明らかにしている。日本では1989年オーラルコミュニケーションA・B・Cの授業を導入、1988年からALT（= Assistant Language Teacher）による授業が開始され、コミュニケーションを重視した授業が行われている。これは、昭和30年代ごろの経済成長時代の幕開けと同時に「役に立つ英語」を求める声広がったためとされている。(p.9) もちろん英語が話せるようになるための教育は必要不可欠である。ただ本来教育は人間性全体を育てるものであるということを、語学教育を行う際に忘れてはいないか、著者はまず私たちに問いかけて

いる。

教育の中で人間性を培わなければならない根拠として、平成20年に文部科学省が示した小中高校の新学習指導要領の改定案において、道徳教育を英語だけでなく各科目において実践しなければならないとした点を著者は挙げている。(p.18) これまでの英語教育の大まかな流れを振り返り、実践と精神どちらかに偏った指導がなされてきた経緯を鑑み、「言葉とは人間の思想や感情を表現する媒体で、人間性を離れてその言葉の現象面や技能面を追求し指導しても人間教育にはならないし、ましてや「生きる力の育成」にはならない」(p.22)と英語教育の細分化に批判的な意見を述べている。著者のこの考えは、コミュニケーションを重視した教育を否定するものでは決してない。「英語教育」と「人間教育」は本来切り離されないものであるにもかかわらず、別口で認識している現状に疑問を呈しているのである。文学や教養というのは各資格試験で測定できないことが多く、効率を重視する現代社会では軽んじられがちであるが、教育により人間性を育むという原点を忘れてはいけない。

それでは私たちは何を目指すべきなのか。著者は「ここで細分化された各英語分野の再統合が必要な時期が来ている。要するに内容的には文学・哲学・宗教のような言語文化で人間の生き方を学び、形態面として英語学・言語学をとおしてその機能を研究し、そして技能面としてコミュニケーションにより授業をおこなうことにより、内容面と機能面と技能面の充実を図り、英語教育を発展させるのが理想である」(p.22)と述べている。近年、大学入試において論理的思考力や人間力を問うような設問を増やすという議論がされているが、そもそも英語教育が精神性を高める方向ではないのであれば、それを試験で測ろうとしても意味をなさない。各種試験で人間力を測ろうとするのであれば、英語教育においても同様に内容面での指導を行わなければならない。

続いて第三章では、外国語教授法の変遷について分析を行っている。コミュニケーション偏重の指導に対する著者の警鐘はこれまで見てきたとおりだが、外国語教授法分野ではこれについてどのように考えられているのか整理がされている。本来ヨーロッパでの外国語学習とは、教養ある言語として地位を得ていたラテン語を口頭練習にて学ぶものであった。その後学校でラテン語が科目として設立されたが、そこでは文法を重んじた指導が行われていた。これらラテン語の教育方法は現代の外国語教育をカリキュラムに組み込む際にも用いられるようになった。(p.25) そのため、文法訳読法が主たる外国語教授法として採用されてきた、という経緯である。

しかし、文法訳読法は母語となる言語を介して理解する習慣がついてしまうと著者は指摘している。確かに文法訳読法については近年多くの議論がなされ、できるだけ習得したい言語を用いて授業を行うべきだという考えが浸透しつつある。ただ、著者は文法訳読法を完全に否定しているわけではない。筆者(中邨)もそのうちの一人で、高校の上級クラスや大学で扱うような英文レベルになると、文法を確認しながら読解しなければ意味が把握できない箇所も少なくないと考えている。そこで著者は、文法訳読法を補助として用いることを提案している(そのための留意点は本文pp.29-30に記載がある)。文法訳読法を補助とする代わりに中心に据える教授法として、著者はいくつかの指導法を提案している。(pp.30-38) これらの教授法により、難易度が高い英文を読解する際にも文法訳読法を排除せずに授業を進めることが可能になるだろう。

第四章では、第二言語習得論の変遷と英文法の指導について記述がされている。応用言語学に加え心理言語学の発展を振り返りながら概観が述べられている。具体的には、チョムスキーの普遍文法、R・ブラウンによる文法事項習得の順序の分析、S・クラッシュェンの言語習得理論、M・ロングのインター

ラクシオン仮説、M・スウェインのアウトプット仮説などである。特にクラッシュンによる第二言語における9形態素の習得順序については、たとえ母語が異なる言語であっても大きく差がみられないといわれているため、我々英語教員もどの順序で学生が文法に精通していくのか認識しておくべきであろう。蛇足だが、第二言語習得論の変遷を知る必要があるのは、良いとされてきた教授法も検証の結果、注意が必要であることが判明する（逆に再評価されることもある）ことが起こりうるためである。私たちが学生時代に受けてきた指導方法というのは、確かに教員になった際の指針にはなるが、そのまま次の世代の学生に用いるかどうかについては検討が必要である。特にICT教材などの発展は目覚ましく、学習者として使用したことのないものも現場では用途に応じて使用しなければならない。常に研究が発展していることを認識し、教授法の変遷/評価には敏感でありたい。

続いて文法指導について述べられている。これまで文法を意識的に学習することは正しい文章を作成することにならないと批判されてきた。しかし、現在ではコミュニケーション重視から教室での文法指導が有用であると考えられるようになった。第四章ではその変遷を端的に示している。退屈・難解だとみなされがちな文法が、教室で教授される必要性があることを改めて示した部分になっており、第三章で問題とされた文法指導に対する著者の考えが再度主張されている。

そもそも、コミュニケーション活動とはどのような姿であるべきなのか。第六章ではまずCanal and Swainのコミュニケーション能力の定義を示し、特に言語文化の社会で適切にコミュニケーションを行う力ー社会言語学的能力ーの重要性が述べられている。本文pp.86-87に例示があるように、異なる文化を持つ国では同じ質問でも別の意味を持つことがあり得る。次章でも紹介がされているが、英語教育において文化・文学・芸術・精神性を学ぶ必要があるのはこの社会言語学的能力に大きく関わるためである。これらの能力を育てるためのコミュニケーション活動として、著者はペア活動・グループ活動・ディベートを挙げ、活動を実施するうえでの注意点を紹介している。授業内でのグループ活動においても、英文の正確さを向上させる目的だけでなく、このような文化や精神性を身に着けるといった観点も意識しておきたい。

第七章では、学習者の誤りを分析しそのフィードバックを行う方法について述べられている。失敗から学ぶ・失敗にこそ成長点があるという姿勢で、適切な誤りの指導を行うために教員が教室で求められる役割は非常に大きい。誤りを完璧に正そうとすると学生は意欲を失ってしまうため、注意が必要である。著者はその場で誤りを訂正するのはコミュニケーションを妨げる文章全体にかかわる間違いのみでよいと主張している。部分的な誤りに対しては、授業後にその日学習した内容を用いたエッセイを書かせ、その添削を行うことで指導をするとしている。(p.94) 第七章末尾で挙げられている5点の指導ポイントは第二・三・四・六章のまとめにもなっていて、コミュニケーション活動、誤りの指導、インプットの方法、文法指導において必要な要素が凝縮されている。誤りについては、本著では概説に留められているが、指摘するかどうか・指摘するのであれば直接的/間接的に指導するか等考慮が必要である。誤りの重要性、授業の場面に応じて使い分けができることを目指していきたい。著者も学生の間言語を生かしながら、継続的で段階的な指導を行わなければならないと主張している。(p.100)

変わって第九章では、アジア各国と比較しながら、日本の小学校における英語教育を評価し考察している。著者は日本の小学校における英語教育に全体的に肯定的な評価をしている。このアジア各国との英語教育の比較分析は小学校のみに限られており、中学校・高等学校について検討されていない

点が少し残念ではあるが、本文p.136以降の児童への英語指導法は中学校・高等学校・大学での指導方法にも応用できる箇所が多い。英語を理論として学習させるのではなく、表現のひとつとして習得させていく重要性が述べられている。

第十一章では、日本語と英語の表現構造の比較を行っている。日本語から英語にそのまま直訳すると理解しづらい言い回しになることがよくある。そのため、この章では日本語・英語の特徴的な視点が解説されている。ライティング・スピーキング指導を行う際、このような視点の違いまで踏み込むことは難しいという意見も理解できる。しかし、英語は日本語と異なる視点を持つと知ることによって「なぜこの表現を用いるのか」納得できることも少なくない。それがむしろ、学習者のライティングとスピーキング力向上の近道になることもあるだろう。この章に関しては、英語教育に携わる者だけでなく、英語でもっと表現できるようになりたい・自然な文章を作りたいと思う学習者にも役立つものになっている。以上のように、英語教育理論の概説が簡潔に明示されている。

2. 精神修養の重要性を検討し、そのための教材を示している点

この章では本著が精神修養の重要性を説き、授業でどのような教材を用いればよいかまで検討されていることを示したい。著者は第十章の冒頭で「国語の教師の役割は、言葉ばかりでなく、日本人の伝統的な精神文化である仏教や振動、古典文学や近代文学を通して国語を指導することである。英語教師の役割も本来は、英語文化の中に融けこんでいるキリスト教思想や、精神の学問である文学を指導することである。英語文化の精神を理解することが、真の国際人としての、人間同士の生きた異文化間コミュニケーション能力の育成につながる。」(p.140)と述べている。学生の英語能力を向上させるだけでなく、コミュニケーションの一助となるような精神文化を伝えることも英語教員としての役割であると主張している。

精神文化について、まず古典・聖書文学を紹介している。言うまでもなく英語圏の文学・文化にはギリシャ・ローマなどのヘレニズム文化と聖書が非常に大きな影響を与えている。近年はイースター等の行事が日本でも認知されるようになってきており、なじみがある学習者も増加している。しかし欧米では我々の想像以上に日常に宗教が融けこんでおり、彼らを理解するためにはある程度古典・聖書文学について学ぶことが必須といえるだろう。

著者は古典・聖書の中から読むべきものとして10の作品をあげ、概要を示している。具体的には“The Epic of Gilgamesh”、“The Old Testament (The King James Version)”、“The Iliad”、“The Odyssey”、“The Oedipus the King”、“The Apology of Socrates”、“Phaedo (The Death of Socrates)”、“Metamorphoses”、“The New Testament”、“The Koran”である。(pp.141-144) すべて一気に読み込むことは難しいだろうから、例えば「エディプスコンプレックス」のように現代でも使用されている言葉の由来となった話から読むのも一興である。

精神性に関していえば、文学に限らず聖書や民主主義についても説明がなされている。アメリカでは約70%の人がキリスト教を信仰しているため、著者は彼らを理解するため聖書の学習が有用であると主張している。(p.145) アメリカの大統領就任演説ひとつをみても、大統領が聖書に手をかざし宣誓しそれを多くの国民が見守るという構図には、彼らの思想が反映されている。確かに日本は多宗教社会だと言われるが、実際私たちは各宗教への理解が必ずしもあるわけではない。「英米圏のネイティブスピーカーと会話ができるようになりたい」と目標を語る学生は少なくないが、そうであるのなら

ある程度の聖書理解は必要不可欠と言えるだろう。これは教員を目指す者に対しても同様である。

これらに加えて、個人主義・欧米の自由とヒューマニズム・民主主義思想の発展についても述べられている。特に民主主義思想の箇所では、日本と米国の民主主義思想の差異について触れ、この違いが教育の仕方にまで影響を及ぼしていると主張している点が興味深い。(pp.151-152) 単に知識を詰め込むだけでは、若者がどう生きていくのか、何を心の支えにして判断していくべきなのかを教育することができないと説き、日本の教育にも精神修養が必要だということを改めて示している。

第十章の最後では英米文学について述べられている。全十二章の中でこの章に最もページが割かれ、英米文学を英語教育に取り入れる必要性を訴えている。「コミュニケーションから英米文学まで」と本著のタイトルにも示されているように、著者が最も伝えたいと箇所であろう。著者は、英米文学の英語教育における教育的意義として「その文化のなかでも、文学は直接にその文化に生きる人間の思想や生き方や哲学を表していて、文学作品によりその言語の芯の意味を知ることができる。ⁱ日本の国語の教員は日本の古典や近代文学を専門に学習し養成され、教壇でもそのような文学的背景を基に生徒に日本文化の遺産を伝承しながら国語の指導をしている。英語教員も、まずは英語を母語とする国の文学に精通し、その国の人間の歴史的文化遺産を、英語という言葉を通して、日本の生徒に伝承することが必要である」(p.154)としている。英語は国際語である以上英米文学から学ぶ必要はないという意見もあるが、英米文学・文化を中心に英語が発展してきた経緯を考えても英米文学から私たちが学ぶことは多い。

これに続いて、英国文学史の概要紹介がされている。ルネッサンス初期の作品としてトマス・モアの『ユートピア』、ダンテ『神曲』、シェイクスピアの『ソネット集』、『ロミオとジュリエット』、『ベニスの商人』、『ハムレット』、『リア王』、『マクベス』、『オセロ』などを取り上げ、特に欧米文学の恋愛観について分析している。理性(reason)を原動力にした精神的な愛と激情(passion)から生じる性欲がはっきりと区別され、性欲が悲劇をもたらし、精神的な愛の大切さを説く作品が多い。

(pp.157-170) 特にシェイクスピアの作品については、明快なストーリーから人間性について考えさせられ、年齢を選ばずに読むことが出来るといえるだろう。また多くが映像化されており、生徒・学生に教える際にも利用しやすい。ルネサンス後期の作品ではミルトンの『楽園の喪失』に触れ、アダムとイヴの物語から理性(reason)と激情(passion)の間で揺れる人間に教訓を示している。

恋愛における「理性」は、現代でも愛されているジェーン・オースティンの『分別と多感』や『高慢と偏見』においても重んじられていると著者は主張している。(pp.166-167)『高慢と偏見』の主人公エリザベスとダーシーは、お互いに想いあっているにも関わらず高慢さと偏見が邪魔をしすれ違う。最終的に理性を重んじ、高慢さと偏見を捨て正直になることで二人は結ばれる。感情的に判断せずに理性を保つことで、最終的に本当の幸せを手にするというストーリーから、理性ある恋愛の重要性がここでも強調されていることは確かに疑いがない。

著者が述べるように、この理性が良、情欲は悪という関係性を発展させたのはシャーロット・ブロンテである。(p.167)『ジェーン・エア』において描かれたのは、幸福のためには理性も情欲もどちらも重要であるというストーリーである。そのほかにも、『デイビッド・カパーフィールド』、『二都物語』、『アダムビード』等を挙げ、英国の恋愛観・結婚観は聖書から大きな影響を受け、今なお変化し続けているということを読み解いている。(p.168) 中学校・高等学校・大学と多感な時期を過ごす学生たちだからこそ、ただ英語を学習するだけでは不十分である。これらの作品を授業に用いて、欧

米文学に描かれている価値観との共通点や差異をも考えさせることができれば学びが多いのではないか。

英国文学に続いて米国文学についても述べられている。ここではエマソンの『自然論』、ナサニエル・ホーソンの『緋文字』、ホイットマンの『草の葉』、ヘンリー・ジェイムズ『デージー・ミラー』、『ある貴婦人の肖像』、アーネスト・ヘミングウェイ『誰がために鐘は鳴る』、スコット・フィッツジェラルド『偉大なるギャツビー』等を挙げ、無垢・純粹・無罪 (innocent) を良しとする米国の精神を紹介している。(pp.170-177)

例えばヘンリー・ジェイムズの『デージー・ミラー』では、米国娘のデージーはinnocentで正直なあまり、ヨーロッパの文化・慣習を持つ人間からは非道德的な人物として軽蔑される。主人公はデージーの本質を見定めているうちに、最終的にデージーは病死してしまう。innocentでいることは悪なのか、いや断じてそうではないというジェイムズの主張が強調されている。ジェイムズの他の作品においてもアメリカ対ヨーロッパの関係が描かれ、米国の象徴としてinnocentが強調される。innocentであるからこそその強みや、美しさを美德として考える米国人の精神をこれらの作品は表していると言えるだろう。この米国文学にみられる思想は墮落前のイヴのinnocentさに対する憧れから生じていると著者は主張している。(pp.175-176)

ただ、このような米国文学に見られる思想は著者が指摘しかつ実感しているように現代のアメリカでは終焉を迎えつつあり、利己的な考え方を基にした衝突も多く発生している。(p.177) 現在の中学校・高等学校の学生がイメージするアメリカはむしろ強大・分断というイメージが強いかもしれない。しかし、我々に和の考え方が根底にあるように、innocentを重んじる思想が彼らにあるということも理解しておく必要がある。

最後に文学作品を用いた英語教育の指導例が一例掲載されている。高校三年生を対象に著者が実際に指導したものとのことだが、指導計画や学生のレベル等は示されていない。そのためいささか情報不足の感が否めないが、問いの設定の仕方などは参考にできる。

以上のように英米文学の作品には理性・激情、人間の罪に対する彼らの精神性が反映されている。著者は「英語教育の根底にこのような文学作品の鑑賞が置かれていなくては、精神文化を宿した英語を異文化の日本人は習得できないし、また真に人間性や理性等の教育的な面を生徒に教授し国際人に育て上げることはできないのである。」(p.177) と締めくくっている。

3. 精神修養を意識した指導実践例が示されている点

精神修養の重要性はこれまで述べてきた通りだが、この章では著者が「教員は学生の精神性を養う役割を担う」とし、それを目標とした指導例を示している点を評価したい。教員は学生の英語力を向上させる授業づくりをすることがもちろん重要だが、それだけでは不十分で教員の授業に対する哲学を確立することが必要と著者は主張している。指導哲学は、通常以下の項目により教員独自の哲学が形作られるとしている。(p.102)

(1) 言語学習者としての教員自身の経験

(2) 個人の特質

(3) 教授法理論に基づいた自らの指導哲学の構築

(1)(2)については、教員個人が受けた教育の経験や個人の性格という意味である。本著で示されて

いる内容は主に(3)に関連するもので、理論を示しながら哲学の構築を提案している。

第七章では、まず教師の役割として6点を挙げている。6点目の「教員の役割は異文化の宗教や哲学を理解して、国際社会に生きる人間としての生き方や自らの人生哲学を生徒が作り出す手助けをすることである。」(p.103)は、まさに著者がコミュニケーション偏重の授業に欠けていると指摘する観点である。

著者が主張する「国際社会に生きる人間としての生き方や自らの人生哲学を生徒が作り出す手助け」とはどういうことか。著者は「生徒の英語学習の目的は様々であり、教員はクラスの生徒の英語学習観を理解し、生徒の学習観が正しいものであればそのニーズに応える授業を構築し、もし生徒の学習観やニーズが誤りであれば正しい学習観を教える必要がある。例えば、生徒が入試のためだけを目標にした英語の学習観を持っている場合は、国際語としての英語の役割を理解させ、入試のためでなく、国際人を目指して英語を習得する大切さを理解させる必要がある。」(p.103)と述べている。著者が言うように、国際社会を生きる学生たちは、単に検定試験で高い英語のスコアを持っているだけでは円滑にネイティブスピーカーとやり取りができるとは言えない。異なった文化背景を持つ彼らとのコミュニケーションにおいて、文化の理解は避けては通れないからである。ボーダーレス化が急速に進む社会だからこそ、相手の文化を理解する(理解しようとする)行為も同じ速度で進めていく必要がある。学生から英語を学習する動機として「ビジネスで英語を使えるようになりたい」「英語を使った仕事をしたい」という声をよく聞くが、仕事であるのなら尚更礼儀や文化について理解しておかなければならない。

このような「精神性の修養」を意識した授業計画や評価の仕方が第八章で述べられている。具体例として高校生を対象とした授業計画が末尾に例示されているが、多くの実践例が掲載されているわけではない。そのため本書はまず理論を読み解き教育哲学について検討するものとして読み、授業案は他の実践書を中心に検討してもらいたい。

そもそも、学生が習得を目指す「生きた英語能力」とは具体的に何を指すのだろうか。第五章では、指導法と合わせて考察がされている。著者は文法事項・スピーキング・リスニング・読解・英文直読直解・パラグラフリーディング・スピーチ・Public Speakingそれぞれの指導法を検討している。ここでは理論と共に、著者の指導計画や授業内活動の提案を知ることができるようになっている。

まずは文法事項の指導についてだが、目標として著者は「文法を知っているだけでなく、使いこなして言いたいことを表現できるようにすること」を掲げている(p.52)。R・エリスのコミュニケーション活動におけるインプットを通した文法指導の研究や、近年の新学習指導要領ではコミュニケーション英語I/II/IIIの中で4技能と共に文法事項も身に着けることを目的として定めていることから、理論として文法を指導するだけでは不十分であると著者は主張している。(p.54)ただ、文法指導はやり方によっては学生に苦手意識を植え付けてしまうことから、授業の中でどこまで文法に触れるか、練習方法はどうか加減が難しいところでもあった。本書ではto不定詞や現在完了についての指導例が掲載されている。特に完了形は苦手とする学生も多いため、一読する価値がある。さらにコミュニケーションを重視して文法指導を行うフォーカス・オン・フォーム(Focus on Form)の指導法についても、指導の際に注意すべき点が述べられている。

次のスピーキングについては、四技能の中で最もコミュニケーションをイメージした指導がなされやすいだろうが、それでもただ工夫もなく音読を繰り返すだけでは不十分である。そこで、その他の

練習方法としてRead and Look up練習・Shadowing練習を紹介している。著者が指摘するように、これらは学生が一人であっても練習できる点が長所であるため、学習方法として授業内に一度取り入れておくことを勧めたい。(p.62) スピーキングの練習＝ネイティブの友人や先生と話すこと、と思い込んでいる学生は少なくないため、他の三技能と同様に個人でも練習できるということを伝えておきたい。

続いて読解指導について、著者は東田千秋や福原麟太郎の言葉を引用しながら、最終的には直読直解を目標とするべきと述べている。ただ直読直解を目標にしても、最初から学習者にそれを求めるのは難しい。そのため一応ある程度英語をそのまま理解できる能力のある生徒への指導であっても、著者は以下のように段階を踏んだ指導をするべきだと主張している。

まず疑似直読直解法である。英語全文を日本語に変換する習慣がついている学生に対し、できるだけ英語の語順のまま、意味ごとに日本語で理解していく方法である。もちろん英語のままわかる箇所は日本語に変換する必要はない。(pp.66-67) よく実際の指導現場では「前から順番にスラッシュを入れて読んでみよう」と指導されることがあるが、このやり方である。この方法であればどの英語学習レベルの学生であっても、できるだけ英語で読む習慣をつけることができる。

次の直読直解指導ステップとして、語彙・文法や構文・内容理解・音読の指導方法を提案している。例えば語彙指導においても、①実物か絵による説明 (realia)、②コンテキスト (文脈) での説明、③英英辞典の説明といった方法でなるべく英語を使うようにする。(p.67) これら3つの方法でも理解ができなかった場合に日本語の意味を与えるようにし、学生が授業に「ついていけない」状況を回避しつつ指導するのがポイントである。このような読解方法を積み重ね、最終的に直読直解ができることを目標にしたい。

これらの読解指導に関連するものとして、パラグラフリーディングの指導法についても触れられている。論理的な英語の文章には、各パラグラフに伝えたい内容を示すトピックセンテンスが存在し、それ以外はトピックセンテンスを支持し補完するものになっている。英語のネイティブスピーカーはこの型に沿って論理的な文章を書くよう指導されていることが多い。筆者の経験であるが、日本では文法指導と比べるとパラグラフリーディングの指導に割かれる時間はそれほど多くない。読解の際には、パラグラフリーディングについても指導する必要があるだろう。後半に述べられているスキーマの理論を基にした能動的かつ積極的な読解指導法は、パラグラフライティングの指導に困ったときにも活用できる。

パラグラフライティングから発展させて、著者はスピーチの指導にも触れている。表現方法がスピーチ (スピーキング) になったとしても、構成の仕方はパラグラフライティングに共通する部分がある。著者はパラグラフの展開の仕方として、6つの方法をあげている。(p.77)

- ① 例をあげて展開させる方法
- ② 時の順番による展開の方法
- ③ 課程による展開の方法
- ④ 理由による展開の方法
- ⑤ 比較対照による展開方法
- ⑥ 原因・結果による展開の方法

ここではこれら6つのパラグラフ展開法の説明と、それがどのような内容を伝えたいときに適切か

が示されている。例えば「①例をあげて展開させる方法」については、趣味を伝えるスピーチ文が掲載されている。どの英文も中学校中級～高等学校レベルであることから、この6つのパラグラフ展開例は学生のライティング/スピーキング指導にそのまま利用できる。

また、つなぎの言葉を適切に使用することで説得力を増すテクニックの指導についても言及されている。英語は接続詞を効果的に用いて、相手を納得させる文章構成を行わなければならない。パラグラフライティングと同様、スピーチ原稿の作成を行う場合にも文章と文章のつなぎを強固にする表現を身に着けることが重要である。ただ文章を作成するのではなく、つながりについても認識させた指導を行いたい。以上のように、本著は教員の指導哲学を確立する手助けをしながら、具体的な指導方法を示している。

まとめ

本著は、理論と実践両方の視点から英語教育を学ぶことができる内容になっている。コミュニケーションと文法指導、会話と文学指導まで網羅したバランスの取れた専門書といえる。特に教員を目指す学生や、教授法に悩みを持つ現場の教員に推薦できる。

注

i 下線は原文のままである。